

# 御土あかし

第20号

発行 あきる野市教育委員会 東京都あきる野市三宮350 電話 042-558-1111 FAX 042-558-1560

## 新編 萩原タケ略伝

郷土史家 石井道郎

### はじめに

萩原タケは没落する旧家に生れ、若くして志をたて自分で自分の人生を切りひらいた女性である。私がタケの伝記を書いてから24年を経たが、今回この略伝を再編し、タケのけなげさに再び涙した。タケの生涯は人々に勇気を与える。タケの伝記は芥川賞作家森禮子さんも書かれたが今回はその『献身』も参考にさせていただいた。記して謝意を表する。



和装のタケ 大正4年42才（『同方』より転載）

### 1 ひたむきな自立心—タケの少女期

萩原タケは明治6年2月7日五日市<sup>なかしも</sup>中下宿の萩原家（現在は寿司店魚治・五日市68）に生まれた。

父喜左衛門は入婿で、家つき娘りんが幼児を残して若死したため、後妻として隣村伊奈村より貰ったのが母ちよである。萩原家は資産も多少はある旧家で、明治初年の家業はわら（主に馬の餌となる）を商い、藁屋と呼ばれた。喜左衛門は商売が不得手で、もともと利の薄い家業をやめ、表通りの店を貸し奥の土蔵わきに引き込んだ。母ちよは貧乏にめげない活達な女性で、実家の父が地域では著名な家塾を開く人物であっただけに長女タケの教育には熱心であったといわれるが、タケの下につぎつぎと男子5人（三男死亡）が生まれるという状況では、タケの背中は空くことのない子守っ子の日々であった。タケは小学校（勸能学校）には3年通っただけである（当時は4年制）。その頃の女子は早ければ15、6才で嫁入りした。事実タケの姉に当たるひさ（喜左衛門の先妻の遺児）は早々と嫁入りしている。母ちよもタケの結婚に備え裁縫から芸事まで習わせ、器用なタケはそれぞれ上達が早かったらしいが、彼女の内心の希望は1日も早い自立であった。日赤看護婦同方会のタケ記念号『同方』によるとタケは少女時代「五日市在住の小島医師より解剖生理の書物を借覧した」とある（小島医師について私は拙著発行後『儀三郎日記』でその存在を確認）。タケは明治25年9月の日赤の看護婦生徒募集（6回生）を見落とし、同年10月に日赤宛に嘆願書を出している。さかのぼって入学させてくれという強引きわまるもので、勿論聞入れられる筈もなく、結局タケは翌26年4月7回生



タケ少女期 15才頃

(当時は年2回募集、1回に7～9名採用)として入学するのであるが、問題はその住所で五日市45番地とある。タケの住所は68番地。45というのは自宅より150メートル程西へ離れた大通りの北側にあった。小島医師宅である。

森禮子さんの書かれた『献身』には小島医師は明治17年(タケ11才)に五日市で開業したとある(住所も一致)。タケは18才の時、当時評判だった巖本善治の「女学雑誌」の通信女学部全科を修了して卒業証書を受けている。この女学部全科の内容をみると和歌・和文・作文・漢学・算術・地理・歴史・動植物・理化学・生理衛生・育児に及ぶ。後の旧制女学校卒業程度を目途に組まれたカリキュラムである。これは1年や2年で修了できる内容ではない。「小島医師より解剖・生理の本を借りる」というのはこの通信教育講義録を独習する際の参考書としてであろう。タケは子供の頃子守りをしながら母方の祖父より借りた本、八犬伝や西遊記などを好んで読んだというが、成長するにつれ組織的に学ぼうと通信教育受講を始めたと思われる。『献身』にはその講義録は全8巻で1巻32銭、女学雑誌は1部5銭で月3回発行とある。山人夫の日当が13銭の時代(『儀三郎日記』)である。18才で卒業免状を得たタケの心は早くも次の行動に向いていた。上京そして産婆学校入学である。親の意向はどうだったのであろう。父親はタケの言うなりであったらしいが、世間なみの結婚を願う母親は当然ながら躊躇したようである。

「親を養い弟たちの面倒をみる」という破天荒な望みを抱くタケの自立志向は強く、ちよもタケの熱意に負けしぶしぶ認めたというのが実情らしい。自立するといっても女子の職業が殆どない明治前期、産婆を選んだタケは若い娘に似ずサメた目もっていたといえよう。通信教育といい、産婆学校といいこれに要する経費をタケが調達したとすれば小島医師のもとで働いたと想定するのが自然である。嘆願書は愛知県明治村に移築された日赤病院に展示されており拙著でも写真入りで紹介しているが、住所が小

島医師宅と気付いたのは今回である。産婆学校入学は惨たんたる失敗に終わった。タケは思い切りよく1年足らずで五日市に引上げている。資金が尽きたのである。自費では無理ということを感じたとき日赤看護婦生徒の募集を知った。その条件の中に月15円支給とあるのを見つけた彼女は動転したことであろう。この嘆願書をもってタケを厚かましい女とするのはかわいそうである。ものおじしないのは生涯を通じての性格であるがこの時は本当にしまったと感じたのであろう。私は秋川市史編さんに参加し静原家文書の中で明治11年8月より12年1月まで草花村の開明学校に勤務している千葉卓三郎(五日市憲法起草者)の月給10円也の受領証を見ている(千葉は正規の小学校訓導の資格をもち当時27才)。嘆願書の住所はタケが親に知られたくない為小島医師より借りたものか、住み込みで働いていたのか確かめようもないし、憶測は避けよう。いずれにしてもタケは半年待ただけで明治26年4月入学の7回生になれた。応募者15名採用9名。日赤看護婦には戦時応召の義務があるがタケはもとより望むところであった。

日本の国際赤十字条約への加盟は明治19年。赤十字病院は佐野常民の創設した博愛社病院(東京飯田町)の後身であるが、日本赤十字社は陸軍省と表裏一体の組織となり、病院長も陸軍医務局長の橋本綱常が就いた。明治24年東京渋谷の広大な皇室御料地の下賜をうけ東洋一といわれた本社病院がたった。看護婦養成は赤十字社第一の使命であるが、日赤は英国のナイチンゲールの看護婦養成学校を範とした。ナイチンゲールは若い娘をさげ、数も少数精鋭主義をとった。日赤が入学資格を20才以上とし、毎回の採用者も10名以下に抑えたのはこのためでタケ達は戦時救護者の核として採用されたのだ(日赤が生徒数を増やし応募者も急増したのは日清戦争後)。タケは親に負担をかけずにすむことが何より嬉しかった。日赤から支給された臨時手当などせつせと親許に送金している。ちよは時に帰宅するタケに結婚話をしかけたようであるが、タケから発する張りつめた意気込みに口をつぐむ他はなかった。

## 2 天職としての日赤看護婦

タケたち養成生徒は昔から日赤にいた従来看護婦と呼ばれている人達に嫉視されたが、特に気のつよ

いタケはいじめの標的になった。「身の上話をしない」「気心が知れない」「スマしている」というのである。タケはサッパリとした男っぽい人間関係を好み、親しんでも狎れることはなかった。「私事を話さない」といわれても学ぶことが山ほどあるタケにはそんなヒマはなかったのだ。タケの卒業成績は中位であったが病院に配属されると俄然頭角をあらわした。手先が器用で患者の気持を察するカンがよかった。器量よしのタケは患者（戦傷病者）に人気があったが、特定の者に片よることなく公平に親切で立振舞が敏捷であった。医官たちはタケの上に「品があって媚びず、優しくてきちんとし、もの静かで敏捷」という日赤看護看護婦のモデル（模範とする型）をみた。病院長橋本綱常は外科の大家で、きびしいことで有名であったがタケは他の人ほどには院長を恐れなかった。職務に対する献身度なら看護婦ながら院長に劣らないという気構えがあった。橋本院長もタケが気に入り手術の介補にも使ったがタケは院長の気持を察することが素早く、院長に雷を落されない唯一の看護婦と言われた。

タケの昇進は目覚ましかった。入学より10年後の明治36年タケは30才で副取締に任じられた。若い管理者である。副取締は微妙な役割でタケは医者や患者の評判は申し分なかったが若い看護婦からは時に反発をまねいた。彼女は看護技術の練達者だけに未熟な者を許せなかったらしい。やさしく導くより自分で手を出してしまう。タケにはまだ全人的にみて欠ける所があったようである。

### 3 タケの渡欧

日赤には皇族華族富豪等赤十字社のパトロン層の家庭に看護者を派遣する制度があった。副取締になる前のタケはよく望まれて出張した。看護技術のすぐれている者は多いがタケのように愛敬があっても謙虚な者は少ない。日赤は宮家や公爵家にはタケを切り札のようにして使った。田舎娘が第一級の洗練された女性になるについてはこうした機会の積み重ねがあった。

明治40年11月のタケのヨーロッパ行きは突然にきまった。かつてタケが出張看護で仕えた伏見宮家の姫君（山内侯爵夫人）が御主人の滞在するパリへ赴かれることになり、その随員に選ばれたのである。これにはタケの見聞をひろめさせようとした日赤幹



弘済丸婦長（北清事変）明治33年27才

部の配慮がみえる。タケの役目は令夫人の健康管理であるが、修羅場を生きぬいてきたタケには骨休めの仕事でしかない。ところでタケは任務を終えるとそのまま日赤に休職を願い出た。パリに滞在してフランス語を習うという。私はタケにしては珍しい決断と受けとり、著書に「パリの休日」として扱った。この時タケを親切に世話した森山駐在武官（後海軍中将）がタケの死後タケを偲んだ文を残しているが、その題は「分に安んじた忠実な人」という（『献身』）。分に安んずるというより分という枠の中に自分をおし込めたのではないかと察する。タケはパリでロマンの華を咲かせたわけではないらしい。とにかくタケの休日は半年程で終り、日赤からの指示で明治42年梨本宮御夫妻の欧州旅行の随行とロンドンで開かれる「看護婦国際会議」に出席することになった。この会議は看護婦の知識・技能の向上とあわせて社会的地位の向上をはかるもので、タケの資格は日赤看護婦団代表ということである。彼女は極東よりの出席者としてその楚々とした容姿も合わせ注目の的になった。タケも外国女性の活発な討議ぶりに深い感銘を受けた。写真によくみる洋装はこの会議の夜会用に自ら望んで作ったものである。

タケの第1回外遊は正味2ヵ年程で終り、明治42年9月に帰国した。彼女の帰国を待つかのように看



洋装のタケ 明治42年10月36才

看護婦取締加藤まさは結婚して去り、タケの取締就任は衆人待望のうちに実現した。日赤幹部が期待した以上に彼女は成長し、人間としての幅を拡げていた。タケの写真は「女学雑誌」にも掲載され、日本にもこんなステキな看護婦さんがいると評判になった。

## おわりに—愛国と人道

タケは監督（取締を改称）として通算28年を勤め、昭和11年5月現役のまま死去、日赤は病院葬を以て報いた。享年63才。その間養成した看護婦2700余名。タケは卒業生の顔・人柄をよく記憶し名監督の名をほしいままにした。またナイチンゲール記章をはじめ内外の勲章、褒章を受けその数も夥しく、何をとっても空前絶後の記録であった。「親を養い弟たちの面倒をみる」という少女期の夢はいつの間にか果たされていた。

かつて日赤社長徳川家達公爵が「看護婦のことはタケにまかせよ」と言ったという。タケもこうした信頼には身をもって答えざるを得なかった。彼女は七夕飾りに「不惑すぎて何の願いの糸かける」と書いた短冊を結んだという。この句にはどうやら結婚話など卒業してしまった雰囲気がある。

『日本赤十字社百年史』に監督萩原タケの提案により、看護婦の語学力を養う制度として外国語学生制度が設けられたことが記されている。大正15年から津田英語塾と協定して2～4年の外国語教育を行うという。この制度は昭和12年廃止まで14人の卒業生を出し、少数だが人材を輩出している。タケの経綸の才を物語る企画といえよう。タケは「国際会議」で活躍する看護婦の姿を忘れられなかったのであろう。この制度の廃止は提案者タケの死と、しのびよる戦争の気配が原因と推測される。

監督タケは机上にジャンヌ・ダルクの像を置いたという。タケは少女の頃より勇ましい愛国者であったが同時に赤十字社を背景に国際社交人として活躍した。彼女の愛国は世界に通ずる愛国、赤十字社のモットーとする人道（ヒューマニティ）と両立する愛国であった。タケの死んだ翌年から日本は中国との泥沼の戦争に入り国際的にも孤立し、最後は世界を相手に戦うという愚を演じた。

明治の日本は日露戦争で生じたロシア人捕虜を国際条約にもとづきキチンと処遇した。大正の第一次大戦では山東半島で日本軍に降伏したドイツ兵は「マツヤマ、マツヤマ」と叫んで手を挙げたという。マツヤマはロシア人捕虜収容所があった四国松山である。

昭和の太平洋戦争では戦争企画者は『戦陣訓』を全軍に下した。そこには精神主義の讃美と生命の軽視、虜囚（捕虜となること）の否定が唱えられていた。戦争末期（制海権も制空権も失った時）の特攻作戦はこうした前提の下に生れた。外国人捕虜に対する国際法的処遇などは当然ながら配慮の外だった。戦後生じたB級C級戦犯の悲劇はこうして発生した。日本兵の戦死者の多くは餓死か海没か玉砕だった。玉砕する軍隊に殉じた日赤看護婦の話は泉下のタケを慟哭させるであろう。グローバルな社会の到来を以て瞑目してもらおう他はない。

- ① タケの嘆願書は現在明治村の日赤病院にはありません。
- ② 五日市郷土館発行『萩原タケ—ナイチンゲール記章に輝く郷土の人』は五日市郷土館、あきる野市役所文化財係、二宮考古館で販売しています。是非ご利用ください。（1冊600円）